

## 咬合医学的視点から見た新しい咬合の概念

神奈川歯科大学、咬合医学研究所  
佐藤貞雄



歯科医療においてなぜ咬合の概念が必要なのか、これは長い間の歯科医療における疑問である。答えは簡単である、それはわれわれには患者がいるからであり、患者は咬合治療を求めているからである。また患者は自分の健康に強い関心があり長期に健康を維持したいと願っているからというのも理由の一つであろう。しかし答えは一見簡単であるが治療上これを実践し、長期に亘って患者の QOL に貢献するのは簡単ではない。

歯科咬合学的にはバランスド咬合に始まりグループファンクション咬合や犬歯誘導咬合など多くの咬合の概念が過去提案されてきたが、なお混乱があるのが実情である。なぜ混乱があるのかというと、それぞれの概念がクリアーに定義されていないのが大きな理由であり、また咬合誘導（オクルーザルガイダンス）を必要とする咀嚼器官の機能が曖昧なままで咬合構築をしようとするからである。すなわち、患者ごとに適切な誘導路が与えられないまま治療を終了するということが多く、それゆえに咬合の崩壊や歯周疾患の増悪、顎関節症の発症、全身的症状の発症など極めて残念な結果を生みだしている。

咬合医学的に咀嚼器官は、極めて特殊に進化してきた機関で咀嚼、発音、嚥下、呼吸、姿勢の維持、審美、ブラキシズムなど多くの機能を持っているが、なかでもブラキシズムはストレス—自律神経系と密接に関連して生体のホメオスタシス維持の役割を果たしている（ストレスマネジメント）。このことから考えると、咬合を考える基本はブラキシズムにおけるグラインデング運動であることが分かる。また、与えるべき咬合平面や咬合誘導路は患者毎の骨格形態や顎路角によって異なっている。それゆえにこれらのことを踏まえ患者毎に適切な咬合を与える必要がある。

### 【略歴】

佐藤貞雄, D.D.S., Ph.D.

1971 神奈川歯科大学、矯正学教室助手

1979 神奈川歯科大学、矯正学教室講師

1988 神奈川歯科大学、矯正学教室助教授

1991 President, Japanese MEAW Technic and Research Foundation

1992 Active member of EH Angle Society of Orthodontists

1996 神奈川歯科大学、矯正学教室教授

2004 Tufts University, School of Dentistry, Boston, USA、客員教授

2010 神奈川歯科大学、学長

2014 神奈川歯科大学、咬合医学研究所、特任教授